

郷土室だより

第144号

平成24年11月30日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 24-037

「変りゆく都市像」(22)

◇「里」の末路

約一世紀前の童謡《春が来た》を手がかりに、東京とその周辺の地域の特徴のなかで、それぞれ特有の季節の移り変わりの仕方があることを、「山・里・野」の順に巡ってきた。

その最中の平成24年8月7日付けの『読売新聞』武蔵野版に《狭山の里山「寄付」増加》の見出しの記事が目についた。その要旨は「西武池袋線と柳瀬川に挟まれて人が容易に立ち入ることができないため、開発を免れ、里山の代表的な樹木、クヌギやケヤキ、ムクノキが自生している土地」を地権者が公益財団法人に寄付したこと、および同様な状況が増加していることを報じたものである。

手元の地図で見るとその場所はすぐに分かった。その場所に限らず、分同じような状況の、地域計画にも近郊都市計画にも鉄道会社からも見放されて地主とはいえなくなった地権者が、使い道のなくなった土地を

公に《寄付》するところまで追い込まれたニュースとも読める。

かつては東京市民の水瓶として尊重された村山・山口両貯水池（現多摩湖・狭山湖）、その水源だった柳瀬川が武蔵野という「野」に出たところ

で、武蔵野の開発の主力と見なされた西武池袋線と並行する場所に、東京近郊開発とは程遠い《自然》の土地があるというニュースでもある。……それは本来の意味での都市計画が無かったということでもある。

東京から狭山丘陵を経てその北西の秩父とを結ぶ池袋線の役割は改めて言うまでもないが、この鉄道の線路の枕木の端から「人が立ち入れない土地」となり、それゆえに《自然》が豊富にあるという指摘は、童謡の表現とは異なる巨大な不

連続線があったことを知らせてくれた。

かつては自然状態にあった「山・里・野」の有機的な連鎖の実態は、多かれ少なかれ大部分がこんなものなのだとする見方の一方で、依然と



村山（前方）山口（後方）貯水池
『都政十年史』より

して盛んな里山＝里川回帰運動も方々で見られる。「里」は都市の萌芽^{ほぎ}なのか、逆にムラの残渣^{ざんざ}としての役割に限られるべきなのかという見方もある。言い換えれば「里」という「小世界」は、「小世界」なりの規模で、独立的にその存立を図ってきた空間だったために、その地域の《豊かさ》をどのように持ち続けてきたかを捉える指標であったのか。または前記の新聞記事のように都市施設の狭間^{はざま}の線路に密着した形で《立ち腐れて》地主が地権者に転落しかねなくなる場合もあるということである。

このような観点で見ると都市の中の《中央区》という「町」の場合も、大企業の立地場所としての「町」、大企業の雇用者層のための「町」、さらに通勤者と常住者が混在する「町」、所得階層別か混在かという形態別の「町」、出店施設と商店街の区別がある「町」などと、前号までの「里」と同じような分類の仕方もある。さらに都市とは「市場」の集積場だと定義する前に、より具体的な現代の多角的な「いちば」の形を確認する必要もありそうである。

◇再掲「首相の市場観」

（ここで前号（143号）末尾の16行を形を変えて再構成しました。不手際をお詫びいたします。）

以下は平成24年1月中旬に『日本経済新聞』に連載された元英首相トニー・ブレア氏の「私の履歴書」の一部である。

とくにその最終回で四年前の金融危機当時の「市場」事情に言及している部分の回顧が面白いので、その一部を今年中（平成24年中）に引用してみよう。

08年秋、世界的な金融危機が起きたことについて「第一に証券化商品などは失敗したが、すべての市場が失敗したのではないこと」。第二に「この危機は政府も、規制も、政治家も、金融政策も失敗したということだ。危機の責任は共有すべきで、市場や銀行だけに負わせるべきではない。」として、続けて

「危機に際し市場を安定させる為に国が介入するのは正しいが、政府の役割は安定を

現したら出来る限り早く退くことだ。危機が当初の銀行危機から政府債務の危機に転じたことは、国や政府にも改革が必要なことを示しているのだ。（後略）」

と彼の「市場観」が《正当》であり同時に《伝統的》であったことがよく分かる記述をしている。

この「モノは言いよう」の見本のような政治の実務家の発言をさらに引用した理由は、この長く続いた連載も、ブレア氏の政府が実行したように「市場論議」からは「出来る限り早く退くこと」だと思ふ昨今だからなのである。しかし「出来る限り早く退く」ことが出来ても、それが問題解決ではないことは言うまでもない。

◇市場論の個性

『魏志倭人伝』の邪馬台国の記述の中の「国国市有り」をキーワードとして、この国の市場の変遷を追ってきた（本誌133号）。それ

を手始めに135号では平成21年10月現在での「ノーベル経済学賞」と市場論」の項で、当時の経済学

と実際の市場とを対比させてみた。その結果は、これまた当然のことだが世界の論者の市場論は、それぞれの論者の《精神的風土》の思考が強く反映していることを確認することにもなった。

今年の《市場がらみ》の話題はなんとと言っても春から初夏にかけてのTPP（環太平洋経済連携協定）の加入可否の論議だった。それはこの連載における日本の古来からの市場観とは真つ向から対立するもので、国際的規制を前提とする貿易市場行為であり、まさにわが国の戦国時代の「楽市楽座」と同じ発想の行為が論議された。

次が欧州連合加盟国の中からの財政危機の表面化であり、米国で発生した住宅ローンの破綻以来の不景気が欧州に飛び火したことで、それが癒されないまま夏にはEUやその銀行団の会合が東京で開かれたが、金融危機を根本から解決できないままに幕となった。

私見だがこのような恒常的な「危機」、…危機とは日本語の場合には瞬間またはそれに近い短時間の意味するが、学問も実務も10年近く無為のまま「危機」を経過さ

せ、政治もその金融事情・経済危機に有効な手段を欠いたまま漂流を続けているようである。

その後の野田首相の TPP についての言及は 11 月 16 日の衆院解散でストップしている。

ここまで書いてきて、これまでに童謡「春が来た」で歌われた春が「山」に来て「里」を経て「野」にいたる有様を描写したのと同じ手法で、同じく日本の代表的な童話の「桃太郎」「猿蟹合戦」と「いちば」との関連を描くことを考えたが、ふとこの連載の第 135 号（平成 21 年 10 月）で取り上げた「ノーベル経済学賞と市場論」の存在を思い出した。

◇経済教室と「市場之祭文」

それは同年 10 月 19 日の『日本経済新聞』の「経済教室」（19 ページ）に、東京大学の柳川範之氏が、『今年のノーベル経済学賞受賞者の、米インディアナ大学のエリノア・オストロム教授と米カリフォルニア大学バークレー校のオリバー・ウィリアムソン名誉教授に授与されたこと』について、その

理由は「彼らの組織や制度などの非市場型メカニズム分析に関する勝れた研究にある」と紹介し、オストロム教授の場合は「共有地の悲劇」と呼ばれる現象に対して新しい視点を提供したことにあるとしている。

その「共有地の悲劇」とは「例えば水産資源のある池を数人で共有している場合を考えよう。この場合、自分が魚をとるとその分、他の人が取れる魚が減るというマインナスの効果をもたらす。しかしそれぞれが自由に魚を取ってもよければ、その他の所有者へのマインナスを考慮せずに行動するため、結果的には乱獲となってしまう。そのため、共有地には何らかの規制が必要だと一般には考えられてきた。だがオストロム教授は、現実には、規制や政府介入がなくても、利用者の共同体が、ルールやそのエンフォースメント（執行）を自分たちで行い、うまく統治している例が多いことを証明した（以下略）」とする。

……ここまで読んできて、何のことはないこのシリーズ(9)、第 130 号（08 年 2 月発行）の後半では、14 世紀半ばの関東地方に武蔵国鷲宮で成立した「市場之祭文」の全文を掲げ、その「統治」の原理を紹介していたことを思い出したのである。

つまり西欧諸国の経済学の童話的《たとえ話》では、関係者が際限の無い私利を追求したあげくの悲劇をどのように「統治」し「執行」して解決するかが、あのノーベル賞に関わる大問題なのであり、さらにブレア前英国首相の回顧談の面白さなのだが、日本では共有地に「市」が開かれる場所は、その地域の公共的空間であり、その「場」が平和に保たれている状況を「衆生の宝」だとする。

そしてそれは神仏と同じ神聖なものだと繰り返し強調する。この「衆生の宝」とは天与のものではなく、その地域住民の合意の結果に公共という概念であることはいうまでもない。さらに付け加えればそのような市場観は江戸時代の間屋株仲間運営にまで脈々と生きていたことを記しておく。

……

09 年という時点で柳川氏の経済教室は『今年のノーベル賞』「統治」分析に脚光・「非市場型」分析、市場機能の否定にあらず・政府の規制や介入に頼らず民間で工夫を」とのまきが付きで「ノーベル経済学賞にオストロム氏ら『市場の失敗』は民間で補完」する社会でなくてはならないという分析結果が受賞に値したと解説されている。

この新聞記事の引用における『市場の失敗』は民間で補完する社会」といった場合、その市場は誰が設立し運営したものであったろうか。さらに「民間で補完」といえば市場は政府に類する公的機関であり、その失敗は民間で：としなければ文意としては通らない。

これは金融市場でも公設の生鮮食品市場でも共通な事柄であって「政府あるいはそれに准ずる機関が運営する市場」（歴史的状況に言い換えれば 16 世紀に織田信長で代表される領主達が宣言した「楽市・楽座」的市場）の失敗は「民間で補完」するのか。またそれが可能

だったのか、ということになる。

あるいは《くどいけれど》「民間機関が運営する市場」の失敗は「政府など公的機関が補完」し、「政府などの機関が運営した市場の失敗」は「民間が補完」するのとは、ぜひノーベル賞の審査員に直接聞いて見たい気がする《くんだり》である。

むしろ事態は逆であって、新聞記事の表現は「民間設立の市場の失敗は公的機関が補完」する社会だと言っているのである。

もちろん14世紀中葉の武蔵国の市場と、西欧現代社会の主として金融市場とは同一に論じられないのだが、一般的に学問上の原理・原則は「時代」を超越して長生きをするものだとすると、その《タイム・ラグ》つまり歴史的視角からすると、「私利の徹底追求の結果の悲劇」と、「いちば」を「衆生の宝」（公共物）と見た彼我の民度の差だともいえよう。

◇「共有地（池？）の悲劇」

前出のオストロム教授の「共有地（池？）の悲劇」の状況を現実

の資本主義的生産状況に即して言え、地球規模の温暖化現象を横目に、有限で多種多様な資源を総合して自動車を作り続ける競争は、「市場の要請」にこたえて地球上のすべての《山間僻地》にまでクルマを走らせることを目標としているのだが、その前提条件としての、例えば化石燃料の枯渇

化？をはじめ、レアメタル資源の偏在などが一旦は《世界》に報道されるが、たいていは程なく技術的に、または政治的に解決されている。ほとんどの「危機」の都度「必要は発明の母」の手によって事態は解決されるのだが、ある日、突然想定外の天変地異が起きるとグローバル化した資本主義的生産行為はパタリと停止してしまう。

その状況の一端を東日本大震災などではなく、ありふれた事例で紹介すると、私自身の体験として、老眼鏡が合わなくなったので駅前

のなじみの眼鏡屋で眼鏡を注文した。眼鏡屋の勧めで国産の有名メーカーのレンズにしたのだが、その工場がなんとタイの大洪水で水没したという理由で、国産であ

りながら一週間の予定が一ヶ月以上もかかり、老人の身の回り品の補給が非常に広範囲な経路を経ていることを改めて実感させられた。

そんな商売で採算が取れるのかという感想は、眼鏡を早く掛けたという《消費者》としては当然の感想であろう。

眼鏡とは比較にならない複合工業製品としての自動車生産と消費者との間には、何倍どころか何乗ものリスクが連鎖しているはずである。日本を代表して世界に君臨した通信・家電・メディアなどの大企業が《音も無く》消滅を続けている状況に「素直」な危惧を覚えないほうが異常なことである。

現在の世界の資本主義的生産状況をはじめ、諸国の金融機関の状況をみると、自然災害ではなく制度的・構造的な理由で、ある日パタリとそれらの「市場」活動が停止する場面を夢に見ることがある。

見たくもない夢だが、夢だといって笑ひ飛ばすことも出来ないものを感じるし、電算の誤入力の結果が瞬間的に思いもよらぬ巨大な悲

劇になったりする場合もある。

競争者相互の「自由競争」により市場内での相手を打ち負かし、独占を果たしたその瞬間に、その市場は崩落への道の急坂を転がり落ちるといって現在の市場原理による「原則」は無視することはできない。

過酷な競争ではなく「出会い」「共栄」の場こそ市場そのものなのだというのが、この《変わりゆく都市像》特に日本の市場の変遷を探るメイン・テーマだった。この「いちば」を象徴するものが「鷺^{わし}和^{わし}市^{わし}」である。

表現を変えると毎年11月の西の日に鷺にちなむ大鳥神社の祭礼がある。いわゆる「お酉^{とり}様」の祭りとして、中世以後現在まで連続として継承されてきた祭りの原則は、前記の「市場之祭文」を捧持する人々の祭日なのである。

この民俗の理念の差異がスカンディナヴィア半島の国に理解されるかどうかを見すえたい。

（鈴木理生）